

ヨハネ8：12

教会に来ると聖歌や賛美歌やゴスペルを聴きます。何となくいいなと感じます。何故かと言うと、実は聖歌や賛美歌という音楽は日本人の心のベースになっているからなのです。昔は笙とか笛という音楽でしたが、明治時代から西洋音楽入ってきて文部省の唱歌が生まれました。しかし、唱歌を作れる人がいなかったのが明治政府は教会に頼んで作っていました。馴染みのある「ふるさと」「春の小川」などを作った岡野貞一や「荒城の月」の滝廉太郎、「赤とんぼ」の山田耕作、三木露風なども熱心なクリスチャンで、そんな人たちが作ったのが唱歌なのです。ですから日本人の精神的な構造は賛美歌にあったのです。

聖書には沢山の話がありますが、今日はヨハネ8章の有名な姦淫の女のお話です。ある時、イエス様が神殿の前でメッセージをしていると大群衆が押し寄せました。普段からキリストの名声を妬んでいたパリサイ人や律法学者たちが大勢いて、一人の女を荒々しくイエス様の前に引っぱり来て言いました。「この女は姦淫の現場でつかまされたのです。モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところであなたは何と言われますか。」石打ちの刑とは、大勢の人が大きな石を持って滅多打ちにしてしまう残酷な死刑です。イエス様はその時何も答えず指で地面に何かを書いていました。「そんな事をしてはいけません」と言えば法律違反になり罰せられてしまいますし、石打ちを赦せば「イエス・キリストの隣人を愛せよと言うのは口先だけだ」と言われてしまいます。どっちにも答えられないような罠だったのです。イエス様は身を起して言われました。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」すると一人去り、二人去り、まるで氷が溶けるようにイエス様と女以外、誰もいなくなったのです。イエス様は彼女に言いました。「あなたを罪に定める者はなかったのですか。」彼女は言いました。「だれもいません。」するとイエス様は言いました。「わたしもあなたを罪に定めません。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」

昔、小林秀雄という文芸評論家がありました。彼が聖書を読み驚き、「聖書というのは問題の人間を扱っているのではなく、人間の問題を扱っている本だ」と論評したそうです。この姦淫の女の話も、パリサイ人たちは「問題の女」としましたが、イエス様は「そうではなく罪というのは人間の問題です」と答えたのです。自分を振り返った時に、石を投げられない…と去っていったのです。この女は3つの問題を持っていましたが、そこから解放されたのです。

① 虚しかった

だから不倫という罪を犯してしまった、喜びがなかった、寂しかった…人生の目的が分からないというのはとても辛いものです。ある時、友人の牧師が集会に行きました。すると一番後ろのベンチに身なりの綺麗な奥さんが座って、暗い顔で下を向いて話を聞いていたそうです。牧師は気になって集会後声をかけると、相談があるというので後日、家に行き話を聞くことになりました。行くと御殿のような家でした。思わず牧師が「天国のような住まいですね。」と言うと、奥さんが言いました。「先生違うんです、うちは地獄です。私の主人は日本全国でも指折りの材木屋の社長です。け

れど主人は女の人が沢山いて帰ってきたことがなく、もう何年も家族そろって食事をしなことがないのです。地獄のような冷え切った家庭です。」お金があること、名声があること、それは幸せではないのです。例え有名であっても名前を失った時というのは断崖絶壁から突き落とされるような苦しみがあるそうです。だから薬をやらないと人生やっていけなくなる人も多くいるのです。虚しかった姦淫の女はキリストに出逢った時に初めて人生が変わったのです。

② いつ死ぬかも分からない状況だった

私たちの心臓は動いていますがいつ止まるかは分かりません。何の保証もないのです。人間はいつまでも生きられません。生まれた順番は関係なく、死ぬ時はバラバラです。そして100%間違いなく人間は死ぬのです。明日、明後日があると思ってしまうですが、ある日人生がピタッと止まる時がやってくるのです。私たちは死を考えた時なかなか勝利できません。ノーベル賞を貰った大江健三郎は「自分はクリスチャンではないけれど、人類の歴史の中でたった一人死んで甦った方がいる、それはイエス・キリストです。その事を何よりも人生の中で大切にしています。」と言っています。死んで甦った方はたった一人しかいないのです。キリストは死に対して勝利をとってくださったのです。キリストは私たちに新しい人生へと導いてくれるのです。

③ 罪の結果

罪というのは恐ろしいものです。「あいつが悪い」と指を指す残り3本の指は自分を指している」と言うように、罪は人のことはよく分かりますが自分のことは分からないものです。私たちは色々な罪を犯します。罪は法律的な罪、道徳的な罪、聖書でいう罪があります。あの事だけは忘れることが出来ない、誰にも知られたくない、親しい人にも言えない…過去を振り返ったらそんな罪があると思います。罪を犯す時、「やめなさい」という声が聞こえたような気がしても「みんなやっているからいいじゃないか、明日から止めればいい。」人間はそう言いながら人生が終わってしまうのです。人生清く生きた人とそうでない人と同じところに行くのでしょうか。聖書は言っています。「神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることにします。(ガラテヤ 6:7) 一度しかない人生です。罪に満ちた人生ではなく、光の中を歩むことが出来る聖書は書いています。罪の中にいた姦淫の女は、「わたしは世の光です。」と言われるイエス・キリストを信じた時、罪からも死からも悩みからも解放されたのです。

イエス・キリストが十字架でなされた奇跡の御業は、私たちの過去の人生の全てを消し去りあなたの人生を作り変えてくださる新しい計画です。イエス・キリストは荒野に道を設け、荒地に川を生み出そうとしています。今がその時です。主が今と言われる時に心を頑なにしておはならないと言われています。新しいスタート、そこには不安や葛藤があります。しかし、主はあなたと共にいると言われました。その為に命をかけてあなたの全ての重荷を背負って行かれました。イエス様が流されたその犠牲を受け取り、全ての過去の罪を降ろしてイエス様と共に進んでいきましょう。

(要約者:西崎 芳栄)

(2月18日)